

# 主体 美術

## SHUTAI-BIYUTSU

主体美術協会は、1964年9月に結成されました。  
私達は作家一人一人が創作を自由に発表出来る場を確保し、美術家の集団として積極的に活動していきたいと思います。  
私達は世界的な視野に立って、豊かな人間性を培いつつ、現実の日本に深く根を下ろした生新な芸術を創造していくことを期しております。

発行：主体美術協会事務局  
〒168-0063  
東京都杉並区和泉4-36-10  
齋藤典久 TEL / FAX 03(6786)1006



矢野 利隆「ボッライオーロによるコラージュ」

### 「終わりのない絵画を」

齋藤典久

第56回主体展の作品が戻り、アトリエの壁に薄青の裏張りを見せて立て掛けられている。この2年間、得体の知れないウィルスの発生とその感染が日本を含め世界中を覆い、感染率を示す世界地図をどんどん赤く染めていった。

2021年の主体展開催までどれほど多くの会議場をキャンセルし、Zoom会議に切り替えただろう。今や過ぎ去ってしまったかのような感染の静けさであるが、このコロナ禍が会員にとっても自分にとっても主体展を開くことの意味を改めて考える機会ともなった。経済がこの2年間で停滞していく中、生活の不安そして発表する会場の閉鎖など、種々の問題も立ちはだかった。

だが主体展は会期前にワクチンも供給されることを受け、会員の意思のもと2021年9月の開催に踏み切った。従来とは異なり、安心安全のため審査人数を制限し、対話を控えるサイレント審査を取り入れた。準備期間も含め会期中のクラスター感染も起こさず、無事主体展が終了できた事は幸いであった。

また特筆すべきは、新しいメディアとしての会場動画。この第56回展から携帯でもPCそしてTVの画面でも、いつでもどこでも作品を動画として鑑賞できるようになった事だ。例会などの会議を重ね、覚悟を決めて臨んだ2年振りの作品群は、出品者と共に質の高い展覧会会場を構成した。この『質の高い展覧会を』と言う文言は創立から現在まで変わらず脈々とつながれている。振り返ると若い頃、日本の美術状況を知る為、作家の所属している公募展を多く見て周り、主体展に応募したことを思い出す。当時は何處に惹かれていたのか判然としない部分もあったが、主体展の会場では何かストンと自分の胸に落ちたのが正直なところだった。それから会員となっ

て初めて参加した例会では、『主体展はどうあるべきか』という熱い議論のやり取りに圧倒された記憶がある。

創立35年記念誌の座談会記事では主体展の質を上げていく為に何をなせるか会員の姿勢、審査や陳列について真剣に意見をぶつけて合っている。この小冊子の特別ページで小谷博貞氏は「主体展をスタートするにあたって、最初から我々はマイナーな団体であることを確認し合っていた。やがてメジャーな団体になろうなどということは、全く考えもしなかった。より小さな団体としてのあり方に充実感と誇りさえ持っていた。創造の可能性を求める事に生の証を立てている創作活動を最も大切にしている団体である」と言っている。

その後会員による『自作を語る』というテーマや外部の評論家、作家を招いての講演会、研究討論会、会場でのアーティストトークなどを開き、また50回記念展では特別企画展示「礎の作家たち」を開催し、主体美術の理念を確認した。若い時に判断としなかったものは、出品を重ね時間をかけて少しずつ理解できる様になった。団体展の一番の利点は、個展やグループ展より多くの人に見てもらえる事である。巡回展を入れるとさらに鑑賞者の数は増える。展覧会に多くの人に来てもらうには、創立時に未来に向け高揚していたであろう思いと、同じ意識で発表していく覚悟が必要になる。この不安な状況下では尚更である。

私にとっての主体展とは具象、非具象に拘らず、スケール感が大きな終わりのない絵画を追求している作品が並んでいる展覧会である。1月から新しい事務局が始動する。まだ感染が収まらない中何が起こるかわからないが、主体の理念を常に顧みながら繋げていきたい。

2022年元旦 蒼天

2022.2  
No.110

### CONTENTS

- 1p 卷頭言 ..... 齋藤 典久
- 2p 第56回主体展審査について ..... 結城 智子
- 3p 第56回主体展陳列について ..... 中嶋 修  
YouTube【公式】主体美術  
チャンネル動画配信について ..... 井上 樹里
- 4p 巡回展報告(京都) ..... 森 慎司  
巡回展報告(名古屋) ..... 伊藤 明美
- 5p 第56回主体展 企画展示  
「素描のちから」 ..... 返町 勝治  
中城芳裕さんを偲んで ..... 山本 靖久
- 6p 2019年新会員への  
アンケート ..... 榎本香菜子
- 7~9p 2021年新会員紹介
- ### ART WAVE
- 10p ●アトリエ訪問 vol.8  
矢野利隆さんのアトリエを  
訪ねて ..... 落合 梨乃
- 11p ●各地の美術展から  
「札幌美術展 佐藤 武」  
札幌芸術の森美術館 ..... 前川 アキ  
●フォトエッセイ  
「中城先生とともに」 ..... 北村 奈美
- 12p インフォメーション  
展覧会記録  
編集後記・その他

# 第56回主体展報告



▲感染予防対策をとった受付作業



▲「今回の審査はサイレント審査です」の紙を正面に張り出した。



▲ポストカードはセルフ販売



▲◆佳作候補の声もプラカードと挙手のみで行った。

## 第56回主体展審査について

事務局展覧会部 結城 智子

東京オリンピックが閉幕すると、新型コロナデルタ株による感染者が激増した。厳重な緊急事態宣言下、上野の東京都美術館にて8月23日から25日にかけて第56回主体展の審査が行われた。出席した会員は例年の約半数、40名弱であった。地下3階の審査会場には飛沫防止フィルムや消毒液を設置し、全員マスク着用、入口の検温に加えて係が毎日体調をチェックした。ディスタンスを十分とて着席し、更なる感染防止策として、対話を極力控え、作品について意見を述べることのないサイレント審査を実施した。サイレント審査では「入選」「佳作候補」など進行に必要な選択肢の札や「初出品」「前回佳作」など最低限必要な情報の札を掲げて、佳作作家を決定するまで出品目録の内容を一切発表することなく、挙手による多数決で審査が進められた。但し、秀作作家の選出においては従来通り出品回数、受賞歴、年齢などを発表した。当初、慣れない方法にとまどう場面もあったが、作品のみで判断しなければならない緊張感を伴う無言の審査に一同全集中した。

一年間のブランク後、コロナ禍が依然収束しない状況で、出品者の減少は当然覚悟していたのだが、蓋を開けてみると前回とさほど変わらない搬入者数だった。むしろ初出品は倍増し、中学生、高校生の初々しい作品が多く見られた。サイズはやや小さめだったが、大人ばかりの公募展に臆することなく伸び伸びと自己表現する若いパワーこそ今後の主体にとって大切な

宝である。公募展は面倒とか古臭いイメージがあり、若者には敬遠されがちである。手軽に作品発表ができるSNSの方が、はるかにメリットが大きいと考えるのだろう。確かにそれも一理ある。しかし、美術館の壁で、毎年作品を発表し続けることにも大きな意義がある。一堂に会した多くの仲間の作品に接して、その中で揉まれながら、原石がしだいに磨かれて光輝くように成長し、飛躍することができるからだ。1回だけ出品してそれで終わりにしないでほしい。根気強く継続することが大切である。

今回の審査では、時間をかけて制作された力作揃いの2点作家が20人も選出された。何かと不自由な日常の中で、このように充実した作品が多数搬入されたことは誠に喜ばしく、出品者の皆様に心より感謝したい。

しかし、いかに苦肉の策だったとはいえ、無言の審査はやはり主体らしくなかった。激論を闘わせて作品の本質や可能性を追求する審査姿勢を主体はずつと貫いてきた。主体の精神はこのような審査によっても継承されていると私は感じる。57回展ではコロナ禍が終息して安全な状況下で十分に意見を尽くす審査が再開できるよう祈りたい。

第56回主体展審査において入選者128名(初入選32名)、佳作作家16名、秀作作家13名、新人賞1名が決定した。8月31日に秀作作家を対象にした会員投票が行われ、同日の総会にて9名の新会員が承認された。

(2021年12月)

# 第56回主体展陳列について

展覧会委員 中嶋 修

一昨年2020年9月の第56回主体展を開催すべきかどうか、新型コロナ緊急事態宣言下、複数人が集まつての会議はできないので主体美術としては初めての試みとしてZoomによるオンライン会議が行われ、会議が繰り返された。何とかして開催したいと可能性を模索した。そして6月28日例会(赤羽会館)で意見を出し合った。「搬入された絵画をただ並べることはできただろうが、会員同士で厳正に審査を行うという主体美術が大切にしてきたことが果たせない。仮に審査できても、三密を避けるため少人数での審査しかできない。地方会員が上野での審査に参加できない。そして会員同士を危険にさらすことはできない。」様々な意見があり、結果2020年の主体展は開催しないことになった。

翌年9月開催に向けて、展覧会委員会は2021年1月17日オンライン会議、少し様子が落ち着いた6月20日には久しぶりに赤羽会館で出席しての会議。そして例会を2021年6月27日に開く。一年を経ても完全に心配がなくなりはしなかったので、否定的な意見もある中、開催に向け会議を持つ。美術館側の理由で閉館しない限り「第56回主体展」搬入作品審査をして開催することを決定する。所謂「三密」にならぬよう準備を整える。

8月22日に東京都美術館「主体展」搬入初日、展示するための資料として会員作品の写真を簡易撮影。23,24日審査時に一般作品の展示部屋を振り分けた。24日に会員作品(縮小作品写真を図に配置)と「素描のちから」(38名の会員が出品)の展示シミュレーションを行った。

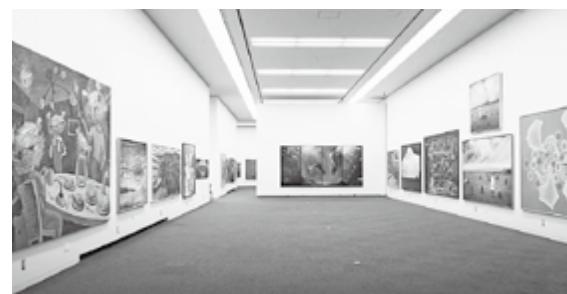
8月31日10時から陳列作業開始。東京都美術館1階の展示室は三棟が並び各棟スタートの部屋、第1室、第6室、第11室は部屋を広く取った。「会員と一般の区別展示」第1から9室まで前半が会員作品、10から15室まで後半が一般作品。「ゆるやかな傾向別展示」、抽象作品の部屋、具象作品の部屋、混合の部屋を設定し事前に振り分けた部屋割りをまず配置し会場効果を考え移動していく。「未来に向けた変化を目指す展示」を心掛け、会員の1室と6室は規格外など大きな作品、新会員の作品を中心に、一般出品者の11室は秀作作家作品などを中心に、佳作作家と新人作家は各部屋に配慮し展示。1棟の第5室に企画展示「素描のちから」を置いた。

8月31日13時半の会員投票に間に合うように陳列を終えた。

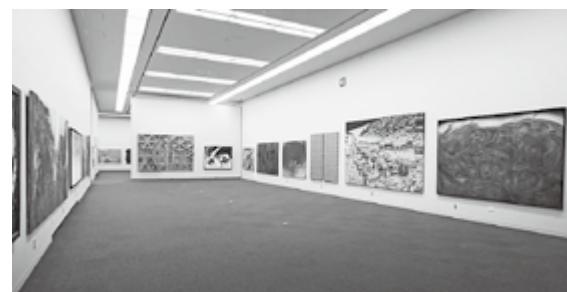
東京都美術館での展示の前日、2021年8月30日に展覧会委員の一人であり「主体展」のために一方ならぬ尽力をした中城芳裕さんが急逝。未完の作品が展示された。

「ゆるやかな傾向別展示」「規格外作品の継続」「新人賞」「企画展示」や「抽象、具象のすみ分けは毎年変更し会員作品は前年と同じ部屋には展示しない」など継続していること、変遷を経たこと、新型コロナ禍を経てこれまでの主体展の展示壁面がどう変化継続していくか。あらためて「未来に向けた変化を目指す展示」を期待したい。これからも会員全員で考えていきたい。

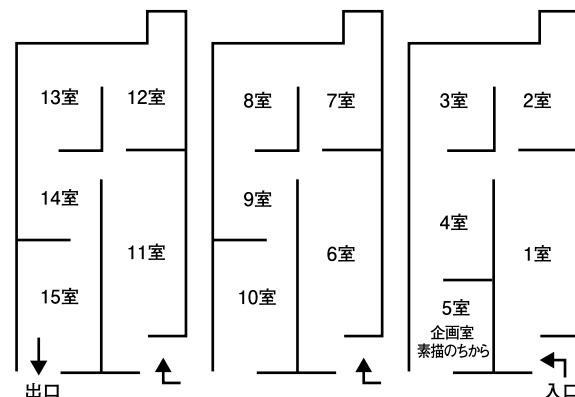
(2021年12月)



1室



6室



## YouTube【公式】主体美術協会チャンネル・動画配信について

研究部 井上 樹里

今年度初めての試みとして、主体展の会場映像を制作し、2021年9月8日よりYouTube【公式】主体美術協会チャンネルを設置いたしました。

ご来場いただけない方々や主体美術に関わるすべての皆様に、東京都美術館での展示会場の様子をお伝えすることを目的に映像を制作し、インターネットのYouTubeにて公式チャンネルを設置し、動画の無料配信を開始しました。昨年のWEBギャラリー同様に、スマートフォンやパソコンからいつでもご覧いただくことができます。

本映像では会員、出品者、企画展示室すべての作品をご覧いただけます。

ぜひ何度でも第56回主体展・東京都美術館会場の様子を臨場感ある映像でお楽しみください。

(2021年12月)



この画面を開いたら、いちばん下の「アップロード動画」の画像をクリックしてください。YouTube動画が開始されます。ぜひ、チャンネル登録をお願いします!

\*その上の画像はプレビュー画面なので、クリックしてもYouTubeには繋がりません。

主体美術協会チャンネル



パソコンからは上の文字で検索  
スマホは右のQRコードから

# 巡回展報告

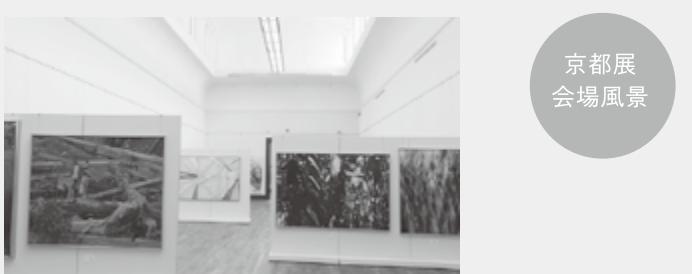
## 京都展

事務局 森 慎司

京都巡回展は10月12日から17日の6日間を会期として、改装2年を経た京都市京セラ美術館の2階南回廊を使用しての開催となりました。新型コロナの第5波と言われた流行の冷めやらぬ中で不安の中での開催となりましたが…。壁面が不足するほどの充実した作品を展示でき、会員諸氏と出品者の協力の下盛況のうちに終了しました。従来の京都市美術館と環境は同じとはいっても、エントランスも会場への道筋も従来とは全く違う新しい美術館となり、それに伴う動線上の混乱など多少ありましたか、全体に白を基調にした清潔感のある内装で新鮮味の感じられる会場となっています。

反面、会場の使い方や搬入作業要領などには課題を残し、作業の効率化や人員の確保、作品展示の方法などを工夫しなければ以前と同質の展覧会を維持できないと思っています。過去3回の原田の森ギャラリーでは同じく改装後の会場でしたが、搬入口やその他諸条件は大きく変わらなかったにもかかわらず、開催作業全般に慣れるのに3年を要したので、今後数年は工夫を重ねなければならないと思っています。

展覧会としてはかつてのインバウンド需要のあった時代と違い、いわゆる新型コロナ第5波収束による緊急事態宣言解除の直後の時期で美術館の外に人があまりいない状態、かつての観光客で溢れる京都からは様変わりする中入場者数が大きく減りました。従来どおり有料にしたもののがメリットは殆どなかったと思います。今後以前のような人の流れが戻って来るイメージもできない中、むしろ入場料は無料にして美術館使用料を少し下げ、市民に無制限に見てもらえるようにするほうが京都展の会計的にも主体展の将来を考えても有益



京都展会場風景



なのではないかと考えています。

また会場は壁面総延長が短いためタイトな展示となり、より細かい展示計画が必要で、これも作業時間がかかる要因となっておりました。展示には何らかの改善策が必要だと考えています。いずれにしても「コロナ禍に負けずに困難の中巡回展を開催できたこと」は主体展の意気を示せたのではないかとひそかに自負しております。今回の展覧会も遠方からの来場者、会員出品者諸氏のご来場もあり、この場をお借りして謝意を述べたいと思います。ありがとうございました。

(2021年12月)

## 名古屋展

事務局 伊藤 明美

「コロナの時代とアートのちから」。強い信念の下に「第56回主体展」は二年ぶりに開催となり、巡回展へのリレーとなりました。主体展ホームページYouTubeから熱氣ある本展の様子が心地よい音楽と共に視聴でき、私達も巡回名古屋展開催に向け期待が一層に高まりました。

京都展の後バトンを受け、名古屋展は愛知県美術館ギャラリーで10月26日(火)～10月31日(日)開催となりました。「巡回名古屋展準備の例会」では、大作揃いの陳列作業が予測される事など話し合い、搬出入作業に携わる人数を考慮し役割検討をしました。東京展の陳列に沿った「巡回名古屋展会場配置図」を、いつもの作成会員から全員が受け取り、それを基に担当会員を中心として各室の可動壁やワイヤー・フックを担当が整え、5本のワイヤーを必要とする作品から1本吊作品まで工夫しつつ、鑑賞者に作家達が作品に込めたメッセージを効果的に伝わるようにまた、会場全体が主体美術の精神や姿勢をアピール出来ているかなどを考慮し、肅々と陳列作業からキャッシュオン付けまでを時間内に終えました。例年の借館会場が窮屈な感がありました。

同館で開催中「曾我蕭白展」来場者の熱気に負けない主体展入場者を期待しました。が、入場総数は1,080名一日平均180名。前回展より665名減数字となり、皆工夫しコロナ禍の広報活動を行いましたが、期待した当日入場券等の売り上げも伸び悩み原因を探っています。

会期前に主体美術中部事務局メンバーが新聞社へ共催依頼に伺いました。初日に中日新聞社の取材があり翌日には、見出し「多様な作風 大作ぞらり 栄・31日まで 2年ぶり主体展」として写真入り掲載して頂く事ができました。早速の「新聞を読んで来ました」という方々が、コロナ感染拡大防止対策受付にもご理解を頂き入場され、



名古屋展会場風景



「熱氣があって凄かった元気が出た」「冬過ぎて芽吹く葡萄の蔭に共感」「思わず絵の前で合掌し癒されました」「3・11から歳月10年の花ですね」「名古屋展会場で、植田寛治・田中朝庸兩氏のご遺作が拝見出来て嬉しく思う」など。会場当番会員には、「陳列作品には、師の亞流作品があるのではなく、よい意味で作品其々がバラバラである。しかし、それは強い独自性が在り凄い事である」など多くの美術関係や市区町村長関係の皆さん、他県会員の方から貴重なお言葉を拝聴できました。感謝申し上げます。

後日の「反省例会」では無事終了し安堵の声でした。「主体美術協会創立趣旨の精神」を軸に捉え「第57回主体展」に向けて皆でまた始まりました。

(2021年12月)

# 「素描のちから」

返町 勝治

第56回主体展の企画展示は元々2020年に予定されていたものですが、コロナ対応で展覧会が開催できず1年遅れで実施することになりました。結果的に38点の作品が出展され想定よりやや少なかった感はありますが、その分ゆとりをもった見やすい展示になり、内容も人物、風景、静物などを墨や木炭、鉛筆、インク、水彩やパステルでの彩色など各自各様の表現でタブロー作品とはひと味違った作者の一面がみられ、観客からも面白い企画だといったコメントをいただきました。

展示の際の開梱作業や閉会後宅急便による返送のための梱包作業が事務局員のみならず多くの会員の協力でスムーズに出来たことにも感謝したいと思います。



## 惜別『予期せぬ沈黙』中城芳裕さんを偲んで

山本 靖久



### 中城芳裕 氏 略歴

1958年	高知県生まれ
1981年	筑波大学芸術専門学群卒業
1983年	筑波大学大学院芸術研究科修了
1985年	個展(フバ画廊)同'86.'87.'89年
1990年	主体展佳作作家
1991年	主体展佳作作家 会員推挙
1992年	ジャパン大賞展 佳作賞
1993年	個展(紀伊國屋画廊)同'96.'99.'01年日韓洋画家交流展
1994年	小磯良平大賞展 佳作賞 神戸市買上
1995年	東京セントラル美術館油絵大賞展
1996年	個展(池袋東武百貨店)同'97
1998年	文化庁現代美術選抜展
2000年	現代日本美術展
2002年	主体展 安田火災美術財団奨励賞
2004年	読売教育賞 美術教育優秀賞
2006年	個展(光画廊)同'15
2012年	公募団体ベストセレクション2012
現在	主体美術協会会員 日本ガラス絵協会会員 日本美術家連盟会員



カレハスケッチャカラカエッテキタ(未完) 200×240cm

余りにも早すぎる、信じられない、そして惜しまれる急逝ではないだろうか。中城さんがこの世にいないことを未だ受け止めることができない。

中城さんは大学生の頃から主体展に出品を始める。画塾の恩師森秀男氏の縁からであると思う。私は彼の存在と作品を知っていたが、初めて会話を交わしたのは、第27回展(1991年)の懇親会の席で、力強い父の像を描いた作品で会員推挙になられた年である。その3年後、彼は事務局の会計者、後に事務局責任者となり、創立会員の大野五郎氏や森芳雄氏などとも親交を深め、両氏の偲ぶ会も責任者として見事に務めあげた。その後、私が次期責任者になったこともあり、主体美術の将来を語る同志となっていました。

主体美術はこれからどのように歩んでいけば良いのか。各公募団体も構成員の高齢化や今後のあり方など問題が山積していた。その中で主体美術では、彼を含めた仲間と多くの課題解決や提案を行ってきた。例えば、新たな絵画表現の取り組みや展示方法を模索するため、美術館の柱や壁面の角を表現の場とした実験的な試み。壁面の優劣を無くす可動壁を移動したジグザグ展示。また主体美術の作品表現としてどこまで許容できるのかを論議した絵画的範疇への問い合わせ。若手作家の育成のため、25歳まで出品料無料とした新人部門の設立など。また第40回記念展では、会員の齊藤望氏、藤本卓氏、そして彼と私で、4m×8mの共同制作「道」の制作を行い発表した。主体美術内部では、個と集団のあり方などで物議を醸したが、外部の多くのメディアでは新たな公募展の発信と評価された。主体以外での活動では、共同制作をした4人で、人物を主題に制作する「音容の会」(銀座サエグサ画廊)を結成。10年間に渡り開催し、切磋琢磨する機会を共に過ごした。近年では日本ガラス絵協会展で新たな表現の模索を互いに行ってきた。主体美術創立の理念であるヒエラルキーのない自由な発表の場をしっかりと継承し、今あるべき公募展のあり方と一緒に考えてきた大切な仲間であり、作家としてもライバル的な存在であった。

そして彼のもう一つの顔として共立女子学園での教員としての側面がある。読売教育賞を受賞するなどの魅力ある授業を展開し、尊敬され、親しみ易い存在でもあり、多くの教え子達が主体展に出品し、既に複数の会員も誕生している。新人作家の発掘や育成といった面からも大きな貢献をしたことは言うまでもない。また都美術館改修工事に伴う審査会場確保の難題でも共立講堂を使用させてもらうなど、会の運営においても尽力された。

晩年は洗礼を受け、聖書を題材しながらも、つげ義春や遠藤周作などの漫画や文学から感受したものを下敷きに、常に斬新な表現の追求を絶やさなかった。神に召され、その追求は道半ばであったであろう。私の今年の出品作「冀求の道」はコロナ禍の収束を願って描き始めたものだったが、彼の闘病を知ってからは、病からの完治を祈る道として描き続けた。亡くなる数日前、お酒が大好きだった彼に「快気祝いで必ず杯を交わそうね」と約束した。その願いも叶わず無念である。でも彼のことだからきっと、天国から主体美術のこと心配気に見守ってくれていると思う。大丈夫でしょ? 良き会だよね、主体美術! いつまでもそう天に杯を傾けるつもりだ。

# 2019年新会員へのアンケート

研究部では、2020年主体展が開催されなかつたことを受け、2019年新会員に集まつていただき抱負や会への要望、疑問などを率直に語つていただきこうと考えていました。ところがコロナは収束に至りませんでしたので、全員にアンケートを実施することにしました。その集約したものを機関紙上で発表いたします。

■アンケート収集日：2021年7月5日～7月28日

■対象者：2019年会員選出者

猪熊 修さん、落合梨乃さん、菊地史津さん、瀧安順子さん、新野安紀子さん、三浦順子さん、水谷重人さん、平田 誠さん

■2019年新会員になって翌年、コロナにより主体展が開催できませんでした。この1年で感じたことはありますか？（制作意欲、その他なんでも）

・いつまでこんな状況が続いていくのか嫌になりますが自分自身コロナ禍でひきこもり、普段より絵を描く時間が多くなりました。コロナ禍で患者が増えると医療が逼迫してきますが、我が家では絵を描く時間が増えると経済が逼迫してきます。

・昨年の梅雨頃は制作意欲が湧かず、読書をしていました。夏頃から少しずつ制作に取り組み現在では描きたくてうずうずしています。制作意欲が湧かなかったのはコロナで部屋に閉じこもっていたせいもあると思います。外でゆっくりと好奇心を追求できる日がくることを願っています。

・コロナ自粛期間中は絵に救われました。誰とも会うこともできませんでしたが絵はひとりで描けますので絵を描くことのできる幸せを感じました。

・2020年は、会員になって初めての「主体展」を緊張と高揚が入り混じった感じで迎えていましたが、延期と決まった時は残念だった半面少し安堵感があったかもしれません。緊張のあまり自分の制作の方向を冷静に見つめていなかったような気がしたからです。それは自分で作った時間ではないから制作が進まなかった言い訳のような何か後ろめたさもありました…。この1年間は地に足がついていない浮遊感を感じながら過ごしてきたように思います。国の政策は何かにつけて後手後手ばかり…世の中は民衆を惑わすような情報しか流れないのでですから何を信じたらいの？という不信感ばかりです。そんな不満がじわじわにじみ出てきたり、その中でやはり軸になって自分を支えてくれていたのが絵を描くことでした。今回のことには限らずいろんなものに振り回されそうになりながら自分に帰ってきました。本当に絵を描いていて良かったと思っています。

・主体展に作品を出品すればようやく、夏が終わり、初秋の風が吹き始める…。この季節にじみの顔、作品に再会できるという長年の楽しみ、イベントがなくなり寂しい限りでした。職業柄、県をまたがないもどかしさもあり、手伝い等に出られず申し訳ない気持ちでいっぱいです。時世柄の充電期間と思い、制作に励もうと思いましたがオリンピックの開催、8月に入りますますの感染者増加、緊急事態宣言の発令。運送屋に依頼してからも、果たしてこのまま制作を続けていいのかという不安もありました。この度も行くことはできませんが、作品だけは行きます（笑）。

・私にとっては絵は心の拠り所だと改めて感じた1年でした。また「締切日」が制作意欲やモチベーションを与えていたと痛感しました。今年は開催できるので暑い日々でも筆が進みました。9年前に夫を亡くし失意の中、何とか絵を描いてきました。思いがけず会員になれた事は私の人生においても大きな喜びであり希望です。この節目を新たなスタートと思い努力を続けていくつもりです。

・自宅で描くことができないので、これまで場所を借りて制作していました。しかしコロナで自由に描くことができなくなり、週に1回しか描きにいけない状態です。今年の夏の作品は1点描くことが精一杯でした。

・1年以上もマスクを強要され、生活行動までも制限されて、オリンピックは次々と問題が発覚、あげくアスリートにはガンバレ、ガンバレ金メダルは何個取れるか、全く理解に苦しむ国です。とりあえず、自分の作品を制作する事はどんな状況にも関わらず自分なりの感性で、の心境です。時代を感じながら。

■主体美術の歴史や、理念、会の規約などおおよそ理解していますか？

・主体美術は新人画会（麻生三郎、靉光、井上長三郎、糸園和三郎、大野五郎、鶴岡政男、寺田政明、松本俊介）の系譜を受け継いでいる展覧会だと思っています。その流れを誇りに思い参加しています。

・おおまかな歴史や理念は先生方や講演会のお話、作品集を拝見し知っています。知っているだけで理解はまだできていません。昔の主体のお話はきらきらとしていてもっと伺いたくなりますが過去にタイムスリップできないことが残念に思います。

・50周年記念誌を興味深く読ませていただき大まかなところは理解できていると思います。礎を築いた作家展示も興味深く拝見し、会の成り立ち、理念も素晴らしいと感じています。

・だいたいは理解していると思います。（3名）

・詳しくない。

・理念、規約は関心を持っていなかった。これを機会に読み直そうと思う。

■今年も東京ではコロナ感染が収束せず、地方会員の殆どが審査、総会に参加できません。会に対しての質問、要望などありますか？

・東京オリンピック、パラリンピックの間に主体展が開催されるわけですが、新たな感染拡大が心配で上京できるかどうか不安です…。主体展の開催時期がコロナのピークを過ぎていることを祈るしかありません。

・初めてのことばかりで不安があります。まだ未熟なのでご指導いただきたいと思うと共に、少しでも主体の力になれればと思っています。

・地方の会員さん達が来られないのは残念です。せめて会場内の動画をアップして見てもらえたたらと思います。

・こういう状況時の地方会員の方々の意見を色々聞きたいです。今も昔もある地方と東京の温度差について、ましてや今回のような状況の中でどのような意見や要望があるのか知りたいです。

・地方にいても自宅でできる簡単な雑用があればお手伝いしたい。

・コロナ禍での開催、事務局の方々は憂慮されていることと思いますが、開催されることを楽しみにしている地方会員は私も含め大勢いるはずです。東京、願わくは京都、名古屋展、無事に終了できるといいですね。

・新会員でいきなりコロナ。主体展が無事終えてから色々教えてもらえると思います。宜しくお願いします。

・（質問、要望）そんな、余裕はありません。生きることで精一杯です。

ご回答ありがとうございました。

「年に1度の展覧会、渾身の作品を発表してほしい」とは昨年9月退任された都美術館の眞室館長さんのお言葉です。会員はスタート地点、日々精進していきましょう。

（文責 榎本香菜子）

# 2021 NEW MEMBER 新会員紹介

第56回主体展にて会員に推挙された9名の方のプロフィールです。自作について語つていただきました。



## 熱田 和博 (あつた かずひろ)

■生年月日 1951年12月

■出身地 神奈川県

■制作に使う主な素材 油彩



「鹿踊りのはじまり(39) 縄文の丘」  
F150

### ■自作について

主に岩手県の民俗芸能である「鹿踊り」をテーマに制作を続けて参りました。「鹿踊り」は「ささら」と言われる長い竹を背中につけて太鼓を打ち鳴らしながら踊る伝統芸能です。私と鹿踊りの出会いは、宮沢賢治の童話「鹿踊りのはじまり」でした。いつか本物の踊りを見たいと願っていたのですが、賢治の生誕100年祭の催しの中でその願いは、叶いました。その後、民衆のエネルギーを感じさせる勇壮な踊りや太鼓、装束に魅せられ毎年のように出かけては制作を続けてきました。地元の方とのご縁も生まれ作品を見ていただけたことも嬉しい限りです。時には、「鹿踊り」そのもののへの思いを、また宮沢賢治への思いを、また自らの生活や社会への思いを込めて「鹿踊り」の制作にこれからも励んで行こうと思います。

### ■会員になってやりたいこと

この度、会員に加えていただき、皆様から絵のこと学べることを何よりも楽しみにしております。よろしくお願いします。

## 井上 雅仁 (いのうえ まさひと)

■生年月日 1955年8月

■出身地 愛媛県

■制作に使う主な素材 キャンバス、油絵具



「Virtue and Vice  
of the Hybrid-Verso  
<The Seven Vices>」  
194x324cm

### ■自作について

テーマを模索する中で、生物と機械が一体となったハイブリッドの世界を想像し、そこに棲むものたちの物語を描くようになった。この世界にも文化、文明、歴史、宗教、戦争があり、善と悪、光と闇がある。善(女神)と悪(女魔)は対決し、戦い、その後、この世界はどこに向かうのか、行きつく未来の姿は?天使や魔女、騎士そして死を象徴する、恐竜や動物の骨などのキャラクター達の活躍など。楽しみながら描いていきたい。

### ■会員になってやりたいこと

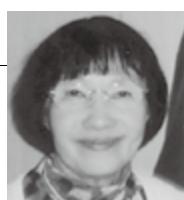
今まで主にハイブリッドの世界を描いてきたが、今後は他にも描きたいと思うものは何でも欲張って、楽しんで描いていきたい。三浦半島に住んでいるので海や花、木、そして人物など。もともと橋梁の設計者として多数の鋼橋の建設に関わってきたので、橋の絵も描いていきたい。さらに抽象画、非具象画などにもチャレンジしたい。

## 岩部 晴子 (いわべ はるこ)

■生年月日 1937年1月

■出身地 東京都

■制作に使う主な素材 アクリル



「MEXICO  
オスンバのメルカド」  
F120

### ■自作について

美校受験、三浪目に石膏デッサン漬けにつぶれて装飾デザイナーになり、20年間絵を描きませんでした。でも、いつも思っているのだったら好きなように描こうと再開し、楽しく描いています。仕事で日本とメキシコを行き来していた従兄に、お前にぴったりの国(少々いしかげんな?)と言われ、通算5年位、家や部屋を借りて行きました。影も明るい光と空気、矛盾を含みつつ、人間本来の生き方ができるメキシコに魅せられて描き続けています。

### ■会員になってやりたいこと

主体展は、友人の故小山珠枝さんから、上下関係がなく実力主義で本当に良いわよと薦められ、それから20年、母の介護やメキシコ行き等で4回休んだだけで毎年出品してきました。仕事や他のことでほとんど年に一枚づつの出品ではありましたが、皆様のご指導や作品を見ることで勉強させていただき、続けることができました。これからも前を目指して明るく上下関係のない主体展の一員として描いていきたいと思います。

## 小林 智江子 (こばやし ちえこ)



「私の住むまち」F130



■生年月日 1946年9月  
■出身地 東京都  
■制作に使う主な素材 アクリル

### ■自作について

都会の風景と室内、植物などを組み合わせて描いてきました。近年、自然の大切さを強く意識するようになりました。気がつくと、家のまわりの自然がどんどん少くなり、寂しい限りです。雑草の茂った空地など今では懐かしい風景です。そうしたことから、近年作品に反映するようになりました。

### ■会員になってやりたいこと

会員となり、身のひきしまる思いで作品にとりくみたいと思います。人の住む都会と自然の共生ができるよう希望しながら絵を描き続けたいと思っております。

主体美術協会に少しでも協力できることがあればうれしいかぎりです。

## 戸田 礼子 (とだ れいこ)



「向うへ」F130



■出身地 東京都  
■制作に使う主な素材 油絵具

### ■自作について

戦場では必ず使われている最新の鉄条網とそれによってへだてられた、懐かしい景色を表現しています。政治的なことは論じるつもりはありません。ただ、映像で祖国を追われて先の見えない人々を見るにつけ、涙や鉄条網で隔てられる現実をどうにかならないものかと思います。

鉄条網がなくなって平和でみんなが明るい未来を目指せる世の中を祈るばかりです。

その思いで私は向こう側に希望の光を描いています。

### ■会員になってやりたいこと

私の環境を描くのに適したものにしました。これから色々な可能性を探って、失敗を恐れずに前進していくつもりです。

## 長崎 祐司 (ながさき ゆうじ)

■生年月日 1952年2月  
■出身地 長野県  
■制作に使う主な素材 油絵具



「果樹-冬 IV」  
162×183cm

### ■自作について

ここ10年ほどは身近な樹々の生命力に魅かれて、それらをモチーフに様々な表現で描いています。ただイメージが固まるまで長い間試行錯誤を繰り返し、パネルに描き始めても完成、上塗り、変更の繰り返しひでが地道な追求と、さまざまな展覧会で刺激を受けながら自分なりの作品づくりをしたいと思っています。田舎者の頑固さでモチーフにはまだ飽きそうもありませんが、季節の樹々をスケッチしながら新たな美しさを発見し表現したい。

### ■会員になってやりたいこと

主体展に出品し始めて40年位、グループ展の仲間に誘われての出品で、その頃の出品者は皆んな出品しなくなり、落選や不出品の繰り返しの私が続いている。最近名古屋のグループ展で主催者の方にお会いでき、作品への意識の高さに刺激を受け帰りましたが、地元でも過去私の家の近くに(故)吉江新二さんがアトリエを構えていた時期があり地元二人の会員とともに私の絵への向き合い方に多大な影響を受けています。作品への意識をさらに高め進めていきたいです。宜しくお願いいたします。

## 第56回主体展 受賞者

### 秀作作家／新会員

熱田 和博(神奈川県)  
井上 雅仁(神奈川県)  
岩部 晴子(東京都)  
小林智江子(埼玉県)  
戸田 礼子(東京都)

### 9名

長崎 祐司(長野県)  
鳩貝 悅子(千葉県)  
松尾 陽子(京都府)  
武藏 義弘(千葉県)

### 秀作作家 4名

荒井 美緒(秋田県)  
太田 琴乃(千葉県)  
日向由美子(埼玉県)  
山崎 清子(神奈川県)

## 鳩貝 悅子 (はとがい ゆうこ)



「INVISIBLE II」 F130



■出身地 東京都

■制作に使う主な素材  
油彩、アクリル

### ■自作について

ここ数年私の作品は、何か得体の知れない未知の生命体を映像で表現することに専念してきたつもりです。その湧き出て来る生命体が画面の中を漂い、時には深い海の底から湧き出て来たものか、また時には宇宙空間や自然界からなのかを見る人に想像を巡らせてもらえれば良いと思っております。

今後どう作品が変化していくのか自分でも少しづくわくしている今日この頃です。

### ■会員になってやりたいこと

まさか今年会員になれるとは思っていなかったので、今はとても嬉しいと同時に不安で一杯です。これからは会員としての自覚を持って作品だけでなく、主体美術協会員として出来る限り会に貢献できるよう努力したいと思いますので宜しくお願い致します。

## 松尾 陽子 (まつお ようこ)

■出身地 京都市

■制作に使う主な素材 油絵具、板



「Peace Piece」  
171×241cm

### ■自作について

2011.3.11—TVから衝撃的な映像ー たまたま自宅の部屋から移動中、黒い津波が左から右へ押し寄せてくる。何だ? 立ち尽くした。白黒の画面?

理解したのと同時に、ワタシの頭の中でこれからは「板に絵を描く」これしかない。京都に住む幼い頃から、母はワタシを連れて時々お寺へ行った。夏休みは高松のおじいちゃんが、栗林公園のバス池へワタシを連れていった。白黒の画面は今もワタシに板にバスを描かせ続けてイル。

### ■会員になってやりたいこと

ひたすら、思うまま描きたい。ココロを板に解き放ち、見えてくる世界をひたすら描く。

バスの葉が、宙を舞い、あどけない子供がその中で遊ぶ。アソベやバスの花と葉と、ツボミはひそかに咲くときを迎え、散りゆく花びらは、静けさにかすかな音をたてる。バスの葉は更に交響曲を奏で、天へ向かう。そんな世界を描きたい。

## 武蔵 義弘 (むさし よしひろ)



■生年月日 1944年1月

■出身地 千葉県

■制作に使う主な素材 油彩

「僕の道は」  
F80

### ■自作について

モチーフとして一番好きなのは人間の顔です。特に中年以降の男性の、様々な挫折や断念の山をくぐりぬけ、なおも助平心を失っていない顔というのは、つい「喝」を入れてみたくなるのですが、それを絵筆で行なうことはできないかというのが狙いです。

### ■会員になってやりたいこと

目下こだわっているのは、哲学では茶色に美を認めるのはためらわれがちなことです。哲学は純色(ユニーク・カラー)を重視する傾向があり、とかく幾何学的に色彩を処理するようです。色彩の美には幾何学よりも政治学の方が妥当するのではと思われます。つまり政治は可能性に関する術だという金言に。これは美を論じたカントの『判断力批判』に政治学批判を読み取ったアレントを深読みしたものですね。とはいえ、わが制作の方は、色の政治学の処理はいまだ五里霧中ののですが。

## 佳作作家

16名

足立 晋平(京都府)

大野喜代枝(埼玉県)

佐藤セツ子(千葉県)

土川 祐子(千葉県)

池田 正子(北海道)

川端みち子(東京都)

佐藤 良克(神奈川県)

西森 聰子(和歌山県)

有藤 光一(東京都)／新人賞

小林かずこ(東京都)

清水 佳奈(茨城県)

藤木もとひろ(東京都)

大澤 政和(長野県)

小松 くみ(埼玉県)

塚本 照子(愛知県)

宮本 圭子(東京都)

# アトリエ訪問 vol.8

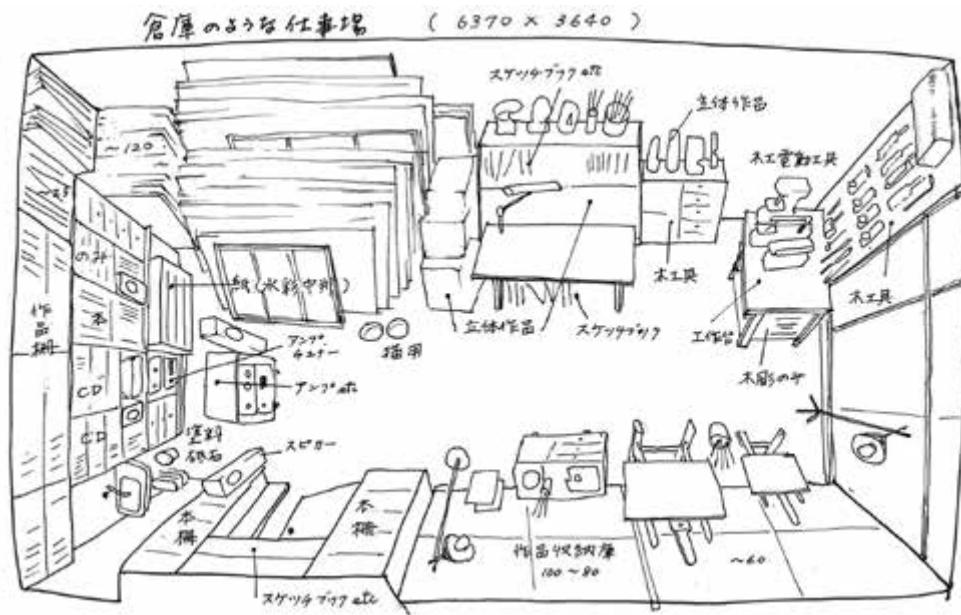
## 『矢野利隆さん』

—松戸のアトリエを訪ねて

千葉県松戸市

取材・文／落合梨乃

写真・構成／藤田俊哉



アトリエ図作成／矢野利隆 氏

矢野さんのアトリエは静かな住宅街。そこに奥様、ご子息のご家族、三匹の猫と暮らしている。取材時に頂いたウィスキーと、気さくな奥様が作る「うずらの煮玉子」は絶品でした。おもてなしに改めて感謝申し上げます。取材中に猫が、様子をうかがいにしばしば顔を出していたことも心和んだ。

アトリエは2階にあり、あたたかい日差しが入る。どこか懐かしい雰囲気があり、落ち着く空間だ。作品や本、CD等が整理され、きれいに並べられている。机にはロダン、花子の頭像があった。アトリエは約12畳で、南窓である。教員をしていた頃は夜に描いていたため気にならなかったが、今では北窓が良かったとおっしゃっていた。

### 〈油絵〉

10代後半に描いた風景画と自画像。最近の作品とは画風は違うが、それは大人っぽく重みのある雰囲気をまとっていた。全体的に黒い油絵だが、有彩色の選び方は現在に通じるところがあるように思う。その頃の矢野さんが好きだった作家はルオー、レンブラント、麻生三郎だとか。各々初期作品が魅力的だという。

部屋には2つの大きなイーゼルがあり制作中の作品が掛けあってた。矢野さんは多くの人物画を描かれているが、モデルとなる人物はないそうだ。ただ頭の中に表れたものを描いている。油絵を描いている途中で、ドローイングをおこない、画面の構成を練り直すことが多いそうだ。現在好きな画家はクラナッハで、不思議な魅力があるとおっしゃっていた。

矢野さんが宝物を見せてくださった。それは拾い集めた鳥のミイラや白骨化した死骸、カブトムシや蟹などの標本だ。ちょっとギョッと/or>



▲10代後半の自画像

は度々作品に登場しているもので「自ら収集するから意味がある」、鳥はあの世とこの世を行ったり来たりする使いという意味があるそうだ。

### 〈木工〉

矢野さんは昔お子様の玩具をつくったことがきっかけで、木工の楽しさに目覚めたそうだ。取材ではパズルと最近制作した木面シリーズを拝見した。木工作品は絵画より抽象的な印象であり、様々な想像をかきたてられる。また表面の木目や口が開くからくりの精密さ、その丁寧な仕事に感銘を受けた。それらはほとんどが廃材からつくられている。デザイン画は冊子にまとめてあり、印刷や製本も矢野さんが自身でなさっている。デザインの発想は書物から生まれることもあるそうだ。ノミは約300本あり、江戸職人から譲り受けたもので、研がれた刃の美しさや並べられた様子から大切にされていることが伝わってきた。

### 〈版画〉

独学で学んだという白が美しい銅版画、思わずこりとしてしまう木版画を拝見した。私は版画を専門に大学で学んでいる。すると製版や刷りの技術のことばかり考えてしまうが、それは間違えだと感じた。良い絵だから良い版画になる。版画の複製性に意味を持たせないかぎり、刷りの上手ばかり求めて意味はないのかもしれない。

### 〈恩師〉

矢野さんは中学2年の時、油絵をはじめられた。そのきっかけは恩師である中学の美術教師との出会い。先生は自宅を訪ねた折、父親に矢野さんを高等学校へ進学させるよう頼んだそうだ。恩師の言葉「うまぶるな（上手ぶるなよ）、自分の好きなことをやろうよ」を今でも心にとめている。



▶矢野さんの宝物の一部



## 各地の 美術館から

# 『札幌美術展 佐藤 武』

札幌芸術の森美術館

現在も宇宙でミッションを続ける小惑星探査機はやぶさ2から、遙か彼方の小惑星の砂を乗せて昨年地球に投下された帰還カプセルが札幌に来た!ということで、11月の平日、仕事帰りに展示会場の札幌市青少年科学館に飛んで行った。カプセル本体、電子回路、ヒートシールド、パラシュート…6年52億キロの航海から帰って来た実物を目の前にして、自身の記憶を辿り広い宇宙に思いを馳せ、見ることのない遠い未来への“希望”を抱く。

それより少し前の休日。ある展覧会に出かけて、無限の時空を行き来するようなスケールを体験した。

静寂の大地に広がる無人の創造都市。時のフィルターがかかったような色彩の空に、どこからともなく射す光。まるで音もなく崩壊する建物、くつきり落ちる黒い影。やがて宙に浮かぶ巨大な石。切り立つ崖下の白く冷たい水…キャンバスに写し出された、見たことのない壮大な光景。

画家・佐藤武さんの作品の前に立つと、現実と幻想、動と静の交差地点で、今のこの瞬間がとても長い時間であるように感じたり、しかしやはり一瞬であることに気づいたりする。そして、光と影を横切り進む自分が、ミクロ的視点では途方もなく長いが、マクロ的視点ではあつという間であることを思わされる。

独学で個展を中心に60年あまり、更なる試みと新しい展開を続ける佐藤武さんは、2000年、地方巡回展の可能性を探り大きな企画を盛り込んだ、創立35年記念企画主体美術北海道展(於・北海道立近代美術館)に、無所属で精力的にご活躍される北海道の作家として招待出品をいただいた11名のうちのお一人。ご記憶にある方もいらっしゃると思う。

会場は、札幌芸術の森美術館。豊かな自然が美しくも厳しい北の大

## 前川 アキ

地のためにつくられた数多くの彫刻が立つ野外美術館、各種貸工房、アトリエ、野外ステージ、屋内アートホール等を備える札幌芸術の森は、四季を通して楽しめる総合文化施設だ。

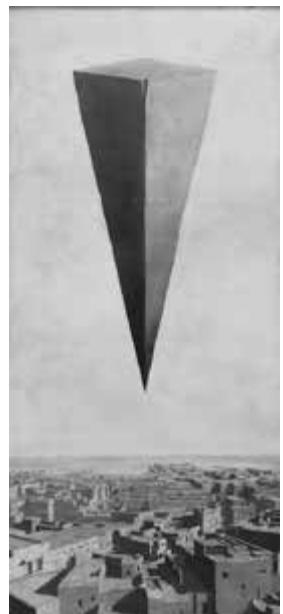
美術館ではこれまでに数多くの魅力的な企画展が開催されている。主体関連では、私は1991年に小谷博貞展、2002年に龜山良雄展を鑑賞しており、その感動は何年経っても色褪せない。

その日、美術館には大勢の小学生達が観覧に訪れ、感想を発表していました。

人は心の内に、こんなにも広い世界、宇宙を持つことができ、それを表現することができる。作品を通して、作者と鑑賞者、複数の鑑賞者の心と心が接し、今この時代に様々な困難を超えて、誰かと何かを共有、共感できるかもしれない。または、いつか、どこか、なにかに、つなげることができるかもしれない。

佐藤武さんの絵のように、秋の日差しが柱の影を長くする美術館の廊下を振り返り、その時も、“希望”を、私は感じたのだった。

コロナ禍において生活が変わり上京できずにいるが、もしまたいつか上京が叶うようになれば、佐藤武さんの素晴らしい図録を抱えてみんなに会いに行きたい。それまで、“希望”を持ち続けて、私は私の宇宙を、ただ地道に描き続けたいと思う。



## フォト・ エッセイ

# 中城先生とともに

北村 奈美

「地下の柄シャツの巨人」30年前、当時中学生だった私が中城先生と出会った頃の印象です。地下の美術室で煙草の香りをさせながら絵を描き、堅い共立の校風の中で柄シャツの先生(本人は先生と呼ばれるのを嫌っていましたが…30年来の呼び方では)は異彩を放っており、中学生だった私はあまり良い印象を持ちませんでした。中2で担任になった時は嫌悪感から涙したという話を、自虐ネタが好きな先生は私が大人になってから何度も楽しそうに話していました。

この時は、まさかその後長きにわたり関わっていくことになるとは思いもよませんでしたが、几帳面な文字、美術の授業での話、HRでの話など知れば知るほど広く深く先生の魅力が広がっていました。特に美術の授業では、「静物画を描くこと=モノの見方」と教わり、美術史では画家の生き様や思想と表現について知ることで、世の中の見方に対する様々な発見があり、美術の面白さに気付かされ、いつのまにか美術の道を選んでいました。

その後、高校・大学、そして主体美術や共立でのクロッキー会と思い返せば、恩師・絵描き・教員として、意識はしていませんでしたがいつの間にか先生の背中を追っていたように思います。ですが、先生は常にどんな場でも上下の関係になることはなく「こうした方がいい」と指南をすることはありませんでした。いつも「貴女の好きなようにしたらいい」と肯定的な言葉で、静かに背中を押してくれました。今思えば、色々と言いたいことはあったと思いますが、相手を信じて静観し言葉を選んで声をかけてくれていたように思います。

主体美術では、全落をした時にはご家族と展覧会を見に来ていたに



▲中学卒業式



▲コロナ禍の合間にコロナビールで乾杯

も関わらず、一緒に精養軒へ食事に誘ってくれ、自身の経験談を話してくれました。また、レセプションなどでは、主体美術の様々な方々を紹介してくれ、その人との関わりが20代30代、そして今でも、迷いや悩みのある中で制作を続ける上での支えとなりました。

教員としても、制作と仕事を両立している点や、授業を通して美術の面白さを伝えている点、目の前のことだけではなくギャラリー構想など将来のビジョンを持っている点等々(毎朝5:30起き、労働時間超過の同士としても)、支えや励ましのみならず目標として常に前を歩いていました。それでいて、決して教師面することなく飾らぬ姿で、「教員が生徒に出来ることなんて無いよ～。やれることやらなきゃ。」と、常に謙虚な姿勢で対応していました。

学校や美術館そして居酒屋など先生と過ごした場所や場面を思い出すと、様々な言葉や行いが降りてきます。まだまだ教わりたいことがありました。70歳と90歳の年寄りになつても大宴会をしたかったという思いはありますかが、最後まで先生は「私は捻くれ者でもあるから、膀胱癌というネームバリューには負けません! これは私の細胞で敵ではないからね。敵をつくらないという意味で無敵だと思っております。」と、悲観的になることなくポジティブな発想を持って生き抜きました。この思いを忘れず前に進んでいきたいです。

## 展覧会記録

2021年8月末～2022年1月末

## ■グレーの世界(井上樹里 他)

8月23日～9月3日

高輪画廊(銀座8)

## ■自力展 見る/見られるの関係性(末

松正樹、寺田政明、中野淳、吉井忠 他)

8月28日～10月3日

板橋区立美術館

## ■Exhibition twice up! V part 1

(北村奈美、園田雅俊、長濱志保、新島知夏)

8月30日～9月5日

あかね画廊(銀座4)

## ■金オーロ遊び展

(斎藤望、種倉紀昭 他)

9月5日～9月28日

アートスペース泉(福島県いわき市)

## ■Exhibition twice up! V part 2

(上野信彦、大西佐頼、福田和幸、前山陽子)

9月6日～9月12日

あかね画廊(銀座4)

## ■第43回北海道ロビー絵画展

(斎藤典久、佐藤善勇、續橋守 他)

9月10日～9月19日

ギャラリー絵夢(新宿3)

## ■道銀芸術文化奨励賞受賞作家展

(橋本礼奈 他)

9月15日～11月7日

北海道立近代美術館

## ■竹越夏子—愛の花—

9月27日～10月3日

MEDEL GALLERY SHU(千代田区)

## ■種倉紀昭展—大洪水のあと—

10月1日～10月27日

Galery AN(岩手県奥州市)

## ■ART SELECTION 2021

(新野安紀子 他)

10月8日～10月19日

わたなべ画廊(飯能市)

## 機関紙「主体美術110号」制作スタッフ

## ■会務報告(事務局 他)

福田 玲子(責任者) 榎木香菜子(研究部)

藤田 俊哉(機関紙部) 森 優司(京都展)

山田 礼二(機関紙部) 伊藤 明美(名古屋展)

結城 智子(展覧会部)

中嶋 修(展覧会委員)

井上 樹里(研究部)

## ■〈風土〉に生きる・VIII

(柏木喜久子 他)

10月11日～10月16日

ギャルリー志門(銀座6)

## ■美術で変える ポストコロナ時代への思いをこめて(續橋守 他)

10月11日～10月23日

ギャラリー暁(銀座6)

## ■Exchange point(長沢晋一 他)

10月18日～10月24日

ドイツ文化会館ロビー(港区赤坂7)

## ■原田文子個展

10月21日～10月26日

すずきギャラリー“彩美”

(千葉県白井市)

## ■斎藤典久展—ひとつづきの風景—

10月21日～10月30日

画廊AKIRA-ISAO(横浜市中区)

## ■丸沼芸術の森コレクション展

(第2会場/山本靖久 他)

10月23日～11月14日

第1会場／朝霞市博物館

第2会場／丸沼芸術の森展示室

## ■彷徨うて、なお足の向くまま

(壇原恵子、鳩貝悦子 他)

10月25日～10月30日

ゆう画廊(銀座3)

## ■5人展—交差する刻—

(柴田かよ子 他)

10月26日～10月31日

ギャラリー名芳洞(名古屋市中区)

## ■第3回石ころ展

(関谷昌夫、大口満 他)

10月29日～11月1日

大島画廊 2F(上越市本町3)

## ■〈象の内・外〉2021(長沢晋一 他)

11月1日～11月10日

ギャラリー絵夢(新宿3)

## ■草莽の風展(松本恵美 他)

11月1日～11月6日

銀座K's Gallrey(銀座1)

## ■歩み続ける それぞれの日々

(永井直子 他)

ギャラリーストーカス

11月3日～11月8日(南青山6)

## ■第8回根岸先生を囲んでの展覧会

～根岸先生を偲んで～(山本靖久 他)

11月3日～11月21日

cafe&amp;galleryカミカワハウス

(小平市)

## ■CAF2021ネビュラ展

(長沢晋一 他)

11月3日～14日

埼玉県立近代美術館

## ■第34回多摩北部5市美術家展

(桑原雄一、加藤紀久子 他)

11月16日～11月21日

東村山市立中央公民館(東村山市)

## ■車崎典子展—音のゆくえ—

11月17日～11月22日

金井画廊(京橋2)

## ■渡邊俊行個展【祈りのかたち】

11月21日～11月27日

仲通りギャラリー(横浜市中区)

## ■山崎弘展

11月23日～11月28日

兜屋画廊(銀座8)

## ■坂本勇展 何げない日常の出会い

12月4日～12月19日

信州高速美術館(長野県伊那市)

## ■白と黒の間に展

(柏木喜久子、長沢晋一 他)

12月6日～12月11日

ギャラリーGK(銀座6)

## ■柿崎覚個展(前期)

12月8日～12月12日

Japan Creative Arts Gallery

(日本橋茅場町3)

## ■柿崎覚個展(後期)

12月15日～12月29日

AI AI PLUS(千葉市中央区)

## ■ピッコリーノ展 一小さな絵画コレクション12—(山本靖久 他)

12月15日～12月20日

美岳画廊(中央区八丁堀)

## ■Ange de Noël 16(山本靖久 他)

12月17日～12月27日

ギャラリー絵夢(新宿3)

## 2022年

## ■福田玲子展—生きてきたこと—

1月5日～1月16日

茨城県つくば美術館(つくば市)

## ■日本ガラス絵協会会員による新春ガラス絵展

新春ガラス絵展

(井上樹里、中城芳裕、中村輝行、山本靖久 他)

1月10日～15日

ぎゃらりいサムホール(銀座1)

## ■山口長男☆野見山暁治と実專展

(長沢晋一 他)

1月10日～1月16日

ギャラリー ムサシ(銀座1)

## ■浅野修展

1月19日～1月29日

銀座K's Gallrey(銀座1)

## ■オノ・ミチ・ヒロ展

1月26日～1月30日

三重画廊(三重県津市)

## ■長沢晋一展

1月31日～2月5日

あらかわ画廊(銀座1)

## ■第6回M-art'79展

(山崎弘 他)

1月31日～2月5日

画廊宮坂(銀座7)

※ホームページの展覧会情報掲載担当は長沢から小林に変わりました。

掲載を希望される方はDMを 事務局研究部 小林 までお送りください。その情報は機関紙にも反映されます。(会員・出品者を問わず掲載いたします)

## 「みちのく未来基金」目標額達成!!

主体美術は東日本大震災後、一過性の支援ではなく実りあるものにしたいと、震災遺児進学の支援をしている「みちのく未来基金」に寄付をしてきました。基金では今後の支援予定者は約500名と予想しており、必要な給付金残額19億円がすでに達成されましたので、2021年2月20日をもって新規の募金受付を終了しました。皆様のご支援に深く感謝、御礼申し上げます。

## 編集後記

■56回展が盛況裏に終わりました。コロナ禍の二年間を経て、画家として作品発表をしたい!想いが各人の力作や展覧会に結実したように思います。この先は『ポストコロナの時代』の展覧会をどう作っていくかが問われます。さて、新事務局がスタートしました。私は四年間担当した機関紙編集から離れました。山田さん、大西さん引き続きよろしくお願いします。(藤田俊哉)

■56回展は結局一度も見ずに終りました。ですが動画を作成してくれたおかげで、なんとなく見てきたつもりになっております。これまでの数十回に及ぶ会議や検討会で集まつたみなさん、審査や会場作り、図録作成などで動いてくれたみなさん、お疲れ様でした。今年度から新しい事務局に移ります。若い世代と、経験豊富な世代が交錯して、新しい動きが出るかもしれません。みなさんが協力をお願いいたします。(山田礼二)

## 2022年度事務局体制

- 責任者／斎藤典久 ■会計／黒川 洋
- 展覧会／山崎 弘・藤本 韶
- 研究／小林宏至(DM受付担当)・上野信彦・井上樹里(ホームページ)
- 広報／【図録・出版】北村奈美・前山陽子【機関紙】山田礼二・大西佐頼 【発送】落合梨乃【広告】新野安紀子
- ◆巡回展／京都：森 優司 名古屋：伊藤明美

## 2022年 第57回主体展 日程

- 本 展／東京都美術館(上野公園)  
2022年9月1日(木)～9月17日(土)16日間(5日は休館)
- 公募搬入／2022年8月22日(月)・23日(火)  
東京都美術館地下3階
- 京 都 展／京都市京セラ美術館本館2階南  
2022年9月27日(火)～10月2日(日)
- 名古屋展／愛知県美術館8F  
2022年10月18日(火)～10月23日(日)